斗う貴き女

一

CRIMSON COMICS

クリムゾン コミックス

大好評発売中！！通販に関しては http://www.alles.or.jp/~uir/をご覧ください

蝕み　1～4　気高き豹

迂闊にもクリードにつかまってしまったリンスレットは、手下たちの快楽の拷問によってそのプライドを蝕まれていく…。

錯乱した隠遁者・花の壁・絶体絶命・ユウナの敗北

ユウナが訪れた試練の間にいた祈り子は偽者だった。ユウナ、ルールー、リュックと次々に卑劣な罠にはまって犯されていく長編作品。

翻弄する魔道士

ブラックマジシャンガールの悲痛な叫びは洗脳された師匠に届くことはなかった…。

玉虫色の天使

陰陽連につかまった壱与。鎌足の復讐をうける操。キルバーンの罠にかかったマァム。三本立てジャンプオールドキャラクター本。

温故知新

先輩たちの淫靡な歓迎会によばれる鳥居凪。外印に体を調べつくされる薫。ヒュンケルへのみせしめとしてザボエラに犯されるマァム。

教育総集編

ギャンザ、ドクター、自分のクローンなどに犯されるイヴ。

セフィリアハード1～3

通常のクリムゾンよりもハードなシリーズ。星の使徒に捕まったセフィリアが抵抗と絶頂を繰り返す長編。

マリア

ＦＤ人につかまったマリアは実験と称した辱めを受ける。

リュックハード１～2　ユウナリュックダブルハード

ユウナのコンサート会場で突如痴漢にあうリュック。抵抗むなしく男たちに代わる代わるおもちゃにされ華やかなステージの下で醜い男たちの餌食になっていく。長編作品。

周りの敵…

そしてこのバルキリースカート…

体に埋められたホムンクルス…

ドク

ドク

ドク

ククク…

フフフ…

いったいどうすれば…！

パミイイ♡

斗う貴き女

第二話

「何もかもが襲い掛かる」

作／カーマイン

ドギャ
やっ…！

……ッ！
ドキッ
ブウン
くっ！
ダメダメ
2本止めた
くらいじゃ…
4本も
あるんだから
ゲッ

キミの武器…
そんなところに
ついてるのが
災いしたねぇ
まさかこんなことに
なるとは思って
なかっただろう？
ぶるぶる
ブウウン
ブウウン
ザワッ

どうだい？
自分の武器に裏切られる気分は？
んっ!!..
…!!..
本来ならそのキミの最も大事な部分を守るはずだったのにねぇ
んっ!!..

ぼあ
ぼあ
ぶるぶる
ぼあ
フフフ…
一生懸命
闘っているようだが…
……っ！
本来の敵は
オレたち3人だぜ
あっ！

へへへ…

ぶるぶる

くっ…まずい…！

この状況でどうやってオレたちを倒すのかな？

ビクッ
オレらが触るところがないなぁ
おっとマ○コとアナル二本挿しかぁ
…ッ！
クックックッ…
んっ！
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ビクッ
んんっ！

仕方ないから乳首でも触ってやろうか？
うっ！
ぶるぶる
クリ
クリ
ほらほら
クリ
クリ
…っ！
グチュ
グチュ
おっ喜んでるぜ
あっ！
ギシ
ほらほら
くっ…！
また電車の続きでもやってやろうか？
ギシ
もっとも電車のときと違って今度はいくら反撃してもいいんだぜ

できるものならなぁ
ビクッ
ぶるぶる
んんっ!!
ビクッ
んっ…!!
錬金の戦士さん
ぐぐ
ぐぐ

そうだ…私は…

こいつら
ホムンクルスたちをたおしで…

ヒクッ

ヒクッ

ヌル

あっ!!

くっ…!!

ぶるぶる

そんなに気持ち
よさそうな声
出してくれると
嬉しくなっちゃうなぁ

もう
闘う気はないのかな？

すべてのホムンクルスを
たおして……

グリ

ブウン

ぶるぶる
……ッ！
ふ…ふざけ…る…なッ！
ん…ッ!!
ん…ッ！
電車の中でも何回もイッてたしなぁ…
そうそうチンポ入れられるたびに声をあげてたなぁ
もみもみ
ブウウン
またイクのかぁ？
私は…ッ！
私は…ッ！
ぶるぶる

ぶるぶる
ぶるぶる
ブウウ

そろそろ
裸にしてやるか

OKOK

いやっ！

……っ!!
ブウン
んっ!!
ビクッ
ビクッ
ビクッ
あっ……!!
やっ!!
ほらほら
じゃあ今度は
ビデオでも
撮ってやろうか
いいね
それ
ブウン
やっ…
やめろ!

やあぁっ！

もみもみ

やめろぉ！

フフフフ…

ぶるぶる

ビクッ!
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ぶるぶる
……!!
おや？
突然
反応が変わったぞ？
何だ…コレは…!
ぶるぶる
まさか…!
パミィイ♥
腹部にいた
ホムンクルスが…
移動して…!

子宮が熱くなる…！
子宮が…！
ぶるぶる
クリクリ
アハハ こりゃ おもしれ～
ほっといても 何回も イッちまってるな
まさかホムンクルスが こんな場所に…！

ぶるぶる
23

……っ!!
ぶるぶる
おやっ？気絶か？
ククク…でもまだ終わらせないぜ
……
武装が解除されたな…
……!!

ガシ
えっ？
ガシ
やっ…
やめろっ！

……っ!!
ガシ
ビクッ
ビクッ

ぶるぶる
……っ!!
どうだ？
ほら冷たいバイブよりもこっちのほうがいいだろう？
んっ……!!
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ビクッ
んっ!!
……っ!!
……っ!!
ギュッ

ほらほら
気持ちいいだろう？
気持ちいいって
言ってみろよ
ぎもち…
わる…いッ！
はっ…くっ！
ぶるぶる
き…き…
こんなの…っ！
グチュ
グチュ

ムリすんなよ
くっ…！
グチュ
グチュ
こ…ころしてやる…！
絶対…！ころし……
あッ！
ああッ！
ぶるぶる

ぶる
ぶる
ぎゅっ
あっ……!!
あっ……!!

くっ……

どうだ？気持ちいいんだろう？

ぶるぶる

全然…こんな…

へへへ…まだ足りないか

あっ！

グッ

ケツにもさしてやるよ

グッ

やっ！

ドキッ

これで満足だろう？

チル

ヒッ!!

ぶるぶる
あっ…!!
…っ!!
あっ!!
あっ!!
ぶるぶる
ぶるぶる
…っ!!
あっ!!

ぶるぶる
ダメだ…。
もう……。
このまま……私は……。

斗う貴き女
特別編

文章／SYARA
絵／カーマイン

「……どこだ……」
迷路のような廃工場地下を捜し回って数時間――。
「くそ……どこにいる……？」
斗貴子は、ようやくそのホムンクルスを見つけだした。
――醜い。
そいつを目の前にしたとき、斗貴子はどうしようもない嫌悪感を感じずにはいられなかった。
ぬらぬらと光る肌を全身に纏い、うねうねと嫌らしく長い舌を動かしている。
「……醜悪だな」
思わず、吐き捨てるような言葉が口をついた。
「あは、褒められちゃいましたねえ、嬉しいな」
人懐こい少年の面影を残したその顔に、下卑た笑みを浮かべて。
その表情には、どこか他のホムンクルスとは違う――何かを感じさせた。
人を「食欲」とは違う何かで見ている、そんな気がしたのだ。

「……何がそんなに面白い？　お前にはもう逃げ場も無いのだぞ」
「これは怖いなぁ。流石は錬金の戦士様だねえ」
斗貴子の構える四本の鎌を目の前にしても、蛙井はおどけた態度を崩さなかった。
「まあいい……これ以上無駄口を叩いている暇は無い――さっさと死ねっ！！！！」
（バルキリースカート――！！）
嫌悪感を振り切るように、彼女は男に斬りつける。
必殺の間合い。
四本の刃は、狙い違わず蛙井の腹を切り裂いた――はずだった。
ドン
18

だが――必殺の鎌は空しく空を斬る。
「ボクの相手が、キミような可愛い女の子で良かったよ、本当に――でないと、罠を張った甲斐がないからねえ」
「わ……罠だと……！？」
必殺の間合いで踏み込んだ2撃目もかわされ、斗貴子の中に疑念が広がる。
これは……奴が速いんじゃない。私が――遅くなっている！？
「あはは、キミがこの地下に足を踏み入れてからゆうに2時間――そろそろ、効果も著（あらわ）れてるでしょ？」
「……毒、か……」
迂闊だった。
創造主も倒され、最後の一匹となった奴に、こんなにも余裕があるとは思ってもいなかった。
「やだなぁ、キミのような可愛い娘に毒なんて使わないよぉ？」
（毒じゃない……！？）
まずい――斗貴子は自分の状態を確認し、愕然とした。
体温／心拍数上昇、視力低下、集中力も乱れている――
全身に力が入らない。
「くっ……」
「今キミの身体に満ちているのは、ボク特製の媚薬だよ。あはは、よく効くでしょ？」
閉鎖された空間の中で戦うセオリーを、忘れていた訳ではない。
だが彼女自身が気づけぬほどの、無味無臭な薬品があるとは――。
「錬金術はねぇ、ホムンクルスや武装錬金だけじゃあないのさ。無味無臭の毒、惚れ薬、媚薬、不老長寿の薬……」
じり……と、蛙井がにじり寄り、斗貴子が後ずさる。
「『人間』どもが抱いたありとあらゆる欲望が形を成した、それが錬金術って奴なんだよ」

自らの不安と悔恨を振り払うかのように裂帛の気合を込めて、彼女は蛙井の顔を目がけて突進した。
「だからぁ、そんな状態でこのボクを殺そうだなんて……」
「！！！！」
蛙井の声が、後ろから聞こえる。
振り向こうとしたときには、彼の長い舌が、伸ばされていた四本の鎌を絡め取っていた。
そのまま、まるで輪ゴムか何かで束ねようとするように、舌はぎりぎりと締め付け始める。
「……甘いんだよ」
ぎり、ぎり、ぎり……ミシミシ……
信じられないほどの力で締め付けられ、その刀身にヒビが走った。
（ば、馬鹿なっ！？）
咄嗟に身を引こうとしたが、まるで鋼鉄のような強さの舌には敵わない。
武装錬金は、闘争本能に反応して起動する。そしてそのパワーの源となっているのだ。
逆に云えば、蛙井の薬によって朦朧としている今の状態では――その強度も切れ味も、極端に落ちてしまう。
（仕方ない、武装解除を――）
そう思った瞬間。
ピシピシ……ぱぁんっ！！
斗貴子の武装錬金は、音を立てて砕け散ってしまった。
「うぁ……っ！！」
ショックに、一瞬意識が飛び掛ける。

目の前が一瞬真っ暗になり、片膝をつく斗貴子。
その隙を突いて、男の長い舌が彼女の服の中へと飛び込んだ。
「！？」
斗貴子の驚愕を尻目に、舌はなめらかな彼女の腹部を「嘗め上げて」いく。
「な……っ！？」
「うふふふ、美味しいなあ、キミの身体」
彼女は喘嗟に逃れようと両足に力を込めたが、全身の力が抜けてしまって満足に動けない。
（まずい……っ！！）
敗北した錬金の戦士が辿る末路――その情景が脳裏に浮かび、恐怖とも似た想いが斗貴子に生じ始めた。
「――キミさぁ、今、ボクに食べられるって思ったでしょ？
でもね、そんな勿体ないこと、しないよ――たっぷりと、『味わわせて』もらうけどね……うふふ」
その台詞に、斗貴子は愕然とした。その言葉の意味するところ――それは……。
「そう、キミはこれから、ボクに玩ばれて犯されるんだよ」
彼女の心を読んだかのように、蛙井はねっとりとした視線で彼女の全身を嘗めつける。
（馬鹿な……そんなこと、有り得ないハズだ……っ！！）
まさか、ホムンクルスが性欲を持つなんて――。そして、それが自分に向けられるなんて――。

困惑と焦り――そんな斗貴子の隙を見逃す
蛙井ではなかった。
腹部を嘗め廻していた舌は、
弾かれたように斗貴子の胸へと伸びて行く。
「あ、あぁぁっ！？」
ようやく我に返ったときには、舌先はもう、
その隠された部分へと届いてしまっていた。
ブラジャーの上から、
舌は彼女の双丘へを巻き付いて行く。
「やめろ……やめろ、
私に、触れるなぁ……っ！！！」
誰にも触れさせた事のない肌を、
いやらしく舌が蠢く――
そのおぞましい感触に、
斗貴子は動揺していた。
薬の影響で鋭敏になった身体は、
衝撃にも似た凶悪な刺激を彼女に伝えている。
（まずい、まずい、まずい――）
「う、く……ぅ、
さ、触るな、触るなぁぁっ！！！」
余りに予想外の出来事が続き、
彼女は軽い恐慌に陥っていた。
無意識に蛙井の舌を掴み
無茶苦茶に両脚をバタつかせて、
この状況から逃げようとする。

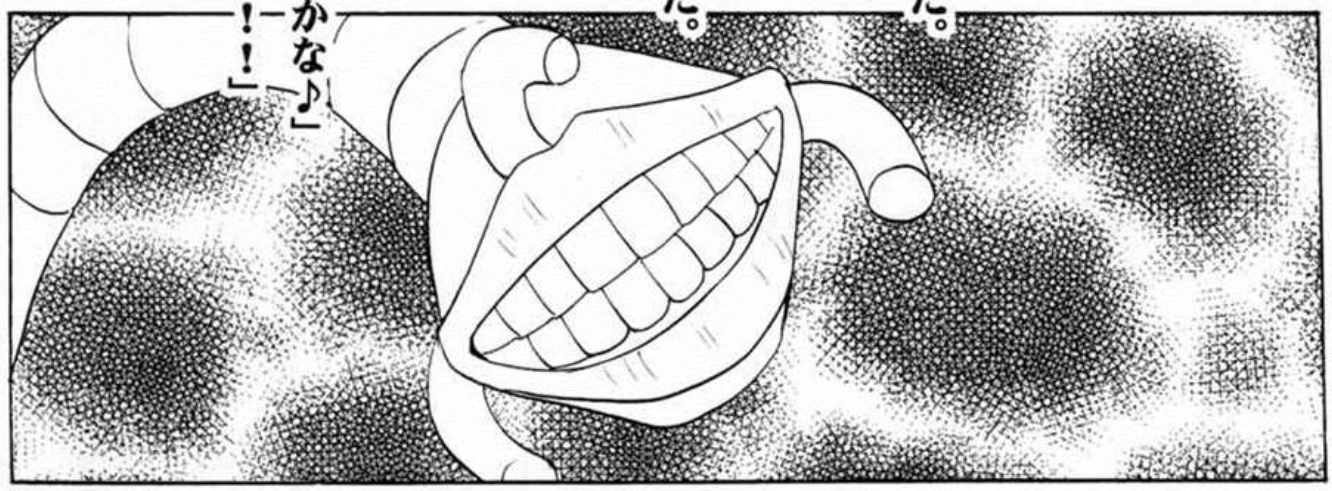
「……うるさいなあ」
——ひゅん
その声とともに、
小ガエル達の触手が彼女の四肢を捕えた。
「！！！」
小さくても、それはホムンクルスのパワー——
斗貴子の必死の抵抗も空しく、
彼女の手足は、床に固定されていく。
「やめ……ろぉぉぉっ！！！」
大の字に床に寝かされ
、必死に抵抗を続ける斗貴子に、
新たな小ガエル達の舌先が近づいていた。
小ガエル達の舌先は、
制服の隙間から容赦なく入り込み、
ヌルヌルと斗貴子の脇腹や
太腿を這い回っていく。
そのいやらしくも巧みな動きに、
彼女の身体はゾクゾクと粟立った。
「やめろぉ、やめろ……っ！！！」
一方で、蛙井の舌は
シンプルなデザインのブラジャーに潜り、
胸の中心まで入り込んでいく。
「さーって、
まずは可愛いおっぱいをいただきまぁす♪」

「やめろっ、やめ……ひっ！」
そして乳首を探し当てたと思うと、
次の瞬間にそっとそれを嘗め上げていた。
——斗貴子の身体に衝撃が走る。
生まれて始めての、妖しい衝撃だった。
今までの悪寒とはまた違う、
思わず引き込まれてしまいそうな痺れが走る。
「——や、やめろ、
やめろ、やめろぉぉぉっ！！！」
白磁のような肌に
薄く滲んでいた汗を嘗め取りながら、
舌先はぬるぬる、
ざらざらと乳首を刺激していた。
「うふふふ——どうだい？
気持ち良いでしょ？」
蛙井の舌先は粘液を
纏ってぬらぬらと蠢き
同時に猫のソレのような
絶妙なザラつきを持っていた。
軽くつつき、くるくると玩び、
転がし、押し潰す——
その度に甘い痺れが身体を駆け抜け
少しずつ斗貴子を追い込んでいく。
「くぅ……っ、うっ、
うぅぅ……っ！！」

体中を縦横無尽に這い回る、幾本もの舌。
斗貴子は困惑と恥辱の中にいた。自分でももう、
どうしようもないほどに、甘い電流が全身を突き抜けていく。
薬の影響とはいえ、舌が胸を嘗めて、
乳首を弄り回しているだけで、
何故こんなにも感じてしまうのか。
悔しくて情けなくて、おかしくなりそうだった。
「ほぉら……段々、硬くなってきたよぉ？」
「……っ！！！」
その言葉に、ぎゅっと目を瞑る。
蛙井の言葉の通り、
斗貴子の乳首は徐々にしこりのような硬さを持ち始めていた。
（駄目だ……感じては、駄目だ……っ！！）
彼女は必死に押し寄せる快感を
シャットアウトしようとするが、
一度反応を始めてしまった身体は止まらない。
「ほぉら、ほら、ほら、ほらぁぁ」
「くぅ、う、うううぅ、うぅぅ……」
むくり、むくりと乳首は起き上がり、
ついには完全に勃起してしまった。
「うふふふ、出来上がり♪」
「くぅ……っ！！」
感じてしまった。
こんな、化け物に、感じさせられてしまった……
錬金の戦士としての彼女のプライドは、
ズタズタになっていく。
「さて、それじゃあメインディッシュを頂こうかなぁ♪」
「――――っ！！！」
蛙井の舌が、腹部を下り始めた。

「もうキミはボクの物なんだ。めくるめく快感を味わわせてあげるからね♪」
「……っ！！」
言葉とともに、ぐい、と斗貴子の身体が持ち上げられ、股間を天井に向かって開かれた。
ひんやりとした地下の空気が、彼女のクレヴァスを撫でていく。
「やめろぉ……っ！！！」
必死に脚を閉じようとするが、がっちりと押さえ込む舌はびくともしない。
チル
チル
蛙井の愛撫は、巧みだった。
薬と、胸への愛撫で感じ始めている斗貴子の身体を、少しずつ、少しずつ蕩けさせてしまう。
「うああ、ああ、ああーーっ……やめろ……お、やめ……ひっ！！！」
「耐えようとしたって無駄だよぉ、こうなったらもうどうしようもないんだから」
周りを、会陰を、クリトリスを……。
繊細に執拗に、そして女性の身体を知り尽くした、熱い舌先が攻め立てる。
本当に身体が溶けてしまうのではないかと、思ってしまう。
「あ、あ、あっ！！！」
ちろ、ちろ、ちろ、ちゅく……ちゅっ、ちゅっ、ちゅっ……
……
!!

「じゃあ、とっておきを
味わわせてあげようかな♪　ほぉら」
「――――っ！！！！」
　彼女の目の前に持ち上がった
蛙井の舌先が、いきなり横に割れる。
　割れた中から姿を見せたのは、
おぞましいことに、小さな人間の口だった。
（いや、だぁ……っ！！！）
　小さな歯が、唇が、
そして人間の舌が――
その割れ目から剥き出て、にいっと嗤った。
「よくできてるでしょぉ♪」
　斗貴子はその醜悪さとおぞましさに、
言葉も出ない。
　そんな彼女の表情を見て、
蛙井は満足そうに笑った。
「まずはぁ、コレでキミをイカせちゃおうかな♪」
「くぅぅ、ううぅ、いやだ……ぁ……っ！！！」
　その姿を存分に斗貴子に見せつけ、
舌先は再び彼女の下着へと潜り込む。
　そして、彼女の性器への、
本格的な責めが始まった。



屹立してしまったクリトリスを、その唇で軽くついばみ、吸い、転がして……。
ちゅく、くち、ちゅるるる、ちゅぅ、ちゅっ、くり、くりくり……
「やめ……やめろ……あああ、あああっ！！！！」
もう、声が押さえられない。
余りにも、強すぎる刺激——錬金の戦士とは言え、十代の少女に耐えられる責めではなかった。
（嫌だ……これ以上……これ以上、敵に生き恥を晒すなんて……）
いっそ、死んだ方がマシだ。
このままでは、本当に、この化け物に玩ばれるだけだった。
それなのに——。

相変わらず彼女の四肢はがっちりと押さえられ、ピクリとも動かない。
核鉄はもう、反応すらしてくれなかった。
（嫌だ……嫌だ、このままでは……本当に……）
彼女の焦りを読み取ったか、蛙井はニヤリと嗤って言った。
「——もうイキそうなのかい？　それじゃあ、仕上げだよ♪　イカせてあげる、おもいっきり、ね！」
「あ——あああああっ！！」

とどめとばかりに、
舌先の唇がクリトリス
を摘まむ。
そして、上下に
しごくように動き始めた。
急激に激しくなった
その責めに、
思考が霧散化していく。
きゅっ、きゅっ、きゅっ……
「くっ、うっ……ううっ……」
（く……そぉ……
意識が……あ……）
刺激から逃れようと、
斗貴子の身体が跳ねる。
が、やはり無駄な抵抗だった。
「やめっ、やっ、
やめろぉっ……
あああっ……！」

……!!

ぎりぎりの状態で快楽に耐え、
絶頂を押さえ込む斗貴子――
だが、蛙井は巧みにその隙を突いた。
無防備になっていた彼女の耳を、
小ガエルの舌先がザラリと嘗めたのだ。
「――――っ!!!!!」
いきなりの感触に、
彼女の身体は、
保っていた危ういバランスを、
一遍に崩されてしまう。
「ふうん……
耳が一番の性感帯のようだね――
ほら、そのままイッちゃいな。
ほら、ほらほら♪」

ぴいんと背筋を反らせて、必死に快感を逃そうとするが、もう限界だった。
（駄目だっ……くる……何かが、くる……）
もう、どうしようもない。
ぶるぶる
「ほぉら、ほぉら、ほぉら♪」
「うあ―ああああああ、いやだぁ、あああああ、あああぁ――――っ!!!!!」
無数の舌先が耳を舐り、クリトリスを擦り、
そして屹立した斗貴子の乳首を締め付け始める。
（駄目だ……もう、ダメ……）
ぶるぶる

決壊したダムのように、もう押し寄せる快感の波を押さえることもできずに、
彼女は一気に絶頂を迎えてしまった。
びくん！！ びくん！！ びくん！！
ぶるぶる
「あはははは、イッた、イッた♪」
「あぁ……ぁ……ぁ……ぅ……」
目眩く快感の嵐――。
木の葉のようにその奔流に飲み込まれながら、
斗貴子は呆然と目を見開いていた。
グチュ
グチュ
ビクッ
ビクッ
……!!

イカされてしまった。
絶頂の余波が収まって行くに連れ、抗えないほどの喪失感が彼女を満たしていく。
「さぁ、今度はボクが楽しむ番だよ♪」
こんな、化け物に。
「……」
蛙井の巨体が、斗貴子にのしかかってきた。
巨大なカエルの股間にあたる部分には、「人間の」蛙井の顔がある。
その顔の下から、巨きな「何か」が、「生えて」きていた。
犯される。
とうとう、最後の純潔を奪われてしまう。
錬金の戦士としてではなく、
一人の少女としての、最後の誇り。
それは戦士として生きることを決意したときに、
覚悟していた事だった。
こういう形になってしまったのは、
己の未熟さが原因であり、仕方のない事だ。
でも――。
(悔しい……)
こんな化け物に犯されることに。
その身の純潔すら、人として愛する誰かに捧げられなかったことに。
「さぁ――行くよ、斗貴子チャン」
「――――っ!!!!!」
52

衝撃が、下腹に走った。
「うぁ……っ！！！！」
熱い。
熱くて、巨きくて、重い――痛みよりも、その衝撃が、斗貴子を突き動かした。
「あぁ、あああぁ、あああぁぁーーーーっ！！！！」
「うあ、キッ……」
メリメリと音を立てて、巨大すぎるペニスが彼女を貫いていく。
全身が、身を引き裂かれる痛みに悲鳴を上げた。
「あぐ……あぁぁ、あああぁぁ……」
膣壁を、まるで抉るように肉棒が突き抜ける。
そして――。
「そぉ、れっ♪」
ぶちっ！！！
「！！！！！」
カッと見開かれた斗貴子の瞳から、つぅっと一筋の滴が伝った。
ズッ

ぶるぶる
「あはは、奪っちゃったぁ、
斗貴子チャンの処女♪」
「は、ぐ……っ！！！！」
膣口から迸った鮮血を見て、
蛙井の声が弾んだ。
「痛い？　まあ、これだけ血が
出てるんじゃ痛いだろうね、あはは」
「ぐぅ……っ、ううぅ……」
あまりの痛みに、
斗貴子は言い返すこともできない。
破瓜の痛みに加えて、
あまりにサイズの違う逸物に抉られて
彼女は気絶寸前だった。
だが、そんな様子の斗貴子にも
蛙井は遠慮することもなく、
無理矢理引き抜き、また押し込んだ。

「うぁ……っ！！！」
「ほらほら、もう少ししたら媚薬が効いて痛くもなくなるさ、でも……」
身体が、真っ二つに裂かれるような痛みの中、斗貴子はその絶望的な言葉を聞いた。
「でも、まずはキミの全てを犯しておかないとね♪」

ぶるぶる

「……！？」
「……そう、奥の奥まで、ね」
にいい、っと、蛙井の唇が歪む。
（まさか……！？）
その意味を知り、斗貴子は更なる絶望の淵に追い込まれた。
「やめろ……っ、それは、それだけは……っ……！！」

「うふふふふ――だぁめ♪　もう遅いよぉ、ほら、そろそろ出てきちゃうもん」
ずん――ずん、ずんずんずん！！
「ぐ……ひ……い……やめ……てぇ……っ！！」
その激しい動きにか、それともすぐそこに迫っている「行為」にか――
彼女自身にも、どちらを拒絶しているのか、分からなくなっていく。
痛みと絶望が交互に押し寄せる数瞬が過ぎ、そして……。

「でる、出るよぉ――
さぁ、キミを犯す最後の仕上げだ、ほら、ほらほらほらぁっ！！」
「あ――――！！！！」
ぶるぶる
どくん。
何かが、斗貴子の子宮を打った。
ど、くん、どぴゅっ、どぴゅ……
「いや――――いやぁぁぁぁっ！！！！！！」
どくっ
どくん

戦いに負けた。
玩ばれ、無理矢理絶頂を味わわされて。
犯されて。
そして――。

どくん、どくん、どくん――
彼女の子宮を満たしていく、何か。
その感覚に、斗貴子の全身が弛緩していく。
「あぁ、ぁ――――」
その瞳からは光が失せ、焦点を失っていた。
呆然と、ただ呆然と、失ってしまった何かを噛み締める。

だが――本当の絶望は、まだ訪れてはいなかったのだ。

悪夢は、まだ、終わらない。

■■■■■■あとがき■■■■■■

斗貴子本第二段です。
前回の本は夏のコミケの締め切りの都合上最後まで描ききれなかったので
ようやく話を終わらせることが出来ました。
もともとひとつの話として考えていたので今回の分だけ見ると
もう一つな感じがします。まぁ、これは仕方ないですね。
バルキリースカートを利用した責め方みたいなのを
もっといろいろ出せるとよかったかな、と思います。

後半のお話は実物提示教育３のシナリオを担当していただいた
ＳＹＡＲＡさんに再び協力していただきました。
やはり小説と挿絵形式というのは興味があります。
これが完成形というわけではなくまだまだ研究中ですが、
きっとマンガだけよりも文章があったほうがより良くなる形が
あるはずだと思っています。
今後も研究していきたいです。

表紙は久しぶりに顔アップ表紙にしてみました。
あまり顔アップ表紙というのは評判がよくないことは知ってますが
斗貴子さんの場合は顔にも傷などのアピールポイントがあるし
とにかくかわいい顔が描きたいということで顔重視構図になってしまいました。

次回は斗貴子ピュア本で描こうと思います。
斗貴子さんには陵辱よりも純愛のほうが似合ってるような気がします。

■■■■■■

斗貴子ボツ表紙

なぜかこのシリーズはよくボツ表紙が発生します。
前回の１巻でもボツ表紙が出ました。
理由としては胸小さめキャラクターなので
セクシー部分をだすとしたら足しかなく、その辺で構図に苦労することと
長袖なのが意外とバランスが取りにくいということでしょう。

なんと史上初ボツ２連続です。
ここまで表紙のデザインをやりなおしたのは初めてです。
ペン入れまでしたのになぜこの構図を取り下げたかというと
デッサンが多少イマイチだったのと顔がかわいくなかったからです。
で、結局あの表紙ですから…なんか今見るとこっちのほがいい気がします。
いっつもこういうことを言ってるような気がしますね…。

■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■

クリムゾンHP

http://www.alles.or.jp/~uir/

どこよりも早い新刊情報。

詳細見本も掲載中。

通販も行っています。

ダウンロード販売案内。

週替わり特別セールもあります。

HP上でアンケートも行っています。ご協力おねがいします。

リクエスト掲示板も設置。

日記も書いてます。

過去のCGと小説も掲載中。

クリムゾンコミックスをフルカラー フルボイスで再現。「ダンシング」シリーズ。公開中。

その他、いろいろな企画を予定しています。

クリムゾンアイ

http://www.alles.or.jp/~uir/eye/index.htm

クリムゾンの携帯サイトもできました。

90 120 160 各サイズでの待ち受け画像。

今まで扱ってきたジャンルの女性キャラクターの画像なら

だいたい揃っています。

携帯で新刊情報もチェックできます。

■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■

初刷 2003年10月27日　発行

「クリムゾン」PRESENTS

斗う貴き女2

発行者／カーマイン

http://www.alles.or.jp/~uir

印刷　大陽出版株式会社さま

禁　無断転載

きりきりの状態で快楽に耐え、絶頂を押さえ込む斗貴子――たが、蛭井は巧みにその隙を突いた。
無防備になっていた彼女の耳を、小カエルの舌先がザラリと嘗めたのだ。
「――――――っ！！！！！」
いきなりの感触に、彼女の身体は、保っていた危ういバランスを、一遍に崩されてしまう。
「ふうん……耳が一番の性感帯のようたね――ほら、そのままイッちゃいな。ほら、ほらほら♪」
ぴいんと背筋を反らせて、必死に快感を逃そうとするが、もう限界だった。
（駄目だっ……くる……何かが、くる……）
もう、どうしようもない。
「ほぉら、ほぉら、ほぉら♪」
「うあ、あああああああ、いやだぁ、ああああ、ああぁ――――――――っ！！」
無数の舌先が耳を舐り、クリトリスを擦り、そして屹立した斗貴子の乳首を締め付け始める。
そこからはもう、なし崩しだった。
（駄目だ……もう、ダメ……）

FOR ADULT ONLY